全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ人・自然・文化

ニュースレター
vol.18
(Apr., 2014)

＜発行＞全国草原再生ネットワーク
http://sogen-net.jp/

火入れの様子を見まもる子どもたち。次の世代を担う。
（広島県北広島町　佐久間智子氏提供）

■火入れに伴う事故防止について

（高橋佳孝：全国草原再生ネットワーク会長）

各地で火入れが行われる季節になりましたが、またも悲しく、残念なニュースがありました。

3 月 8 日、午後 1 時 20 分ごろ、大分・竹田市久住高原の野焼きで 1 人が全身やけどを負って亡くなられる事故が発生してしまいました。不幸にも、再び人命に関わる事故が起きてしましまったことは事実です。

火入れは、草資源を管理する上で、また、集落のコミュニティを支える上で、また、草原の景観や生物を守る上で不可欠な、とても大切な、しかも効果的な作業です。しかし、作業を持続するためには、事故を起こさない仕組みや意識が大前提となります。

草原再生ネットワークでも過去、様々な機会で呼びかけてまいりましたが、火入れの鉄則は、「人命が第一」です。

もう一度、そのことを皆さんと再確認したいと思います。あえて具体的な事項を並べさせていただきますが、補足があればぜひお願いします。このコメントで行いたいことは、意識を共有して、火入れに伴うリスクを回避することです。

具体的には、それぞれの実施団体において

1．リスクが高い場合には、勇気をもって火入れを止めるシステム
2．当日の作業に関わる全員への、「安全が第一である」という意識統一
3．指揮系統の明確化
4．参加者全員の動きを指揮者が把握し、安全を確保する仕組み

など、遵守すべき項目が整っているかを確認し、火入れを実行する必要があると考えます。

阿蘇においても、研修、教育、リーダー育成、統率に従う意識を大切に、きちんとした仕組みづくりと緊張感を共有しながら野焼き支援ボランティア活動が継続されてきました。しかしそのような中でも一昨年、悲しい事故が発生してしまいました。そこで阿蘇では、もう一度、原点に立ち戻り、ヒヤリ・ハット集の作成や、燃えない素材の作業着を参加者に斡旋するなど、さらなる安全に向けて取り組んでいます。

そして同様に、全国草原再生ネットワークにおいても、全国版野焼き草刈りヒヤリ・ハット集の作成を進めています。このような取り組みの矢先での事故となってしまい、非常に心苦しい限りです。

これから 5 月ごろまで、各地での火入れ活動は続いていきます。今年は大雪を始めとする悪天候のために、火入れの延期が続く地域も多いと聞いています。度重なる延期に焦る気持ちもあるかと思いますが、その中で、安全を積み重ねていくことが、社会的に信頼を得る大きな源泉になります。

くどいようですが、何よりも優先すべきは人命だということをぜひ忘れずに、もう一度、重要な心得を再認識して、野焼きの作業やイベントへの誘導、参加をお願いいたします。

■第 10 回全国草原サミット・シンポジウムについて

第 10 回全国草原サミット･シンポジウムが阿蘇で開催されることが決まり、4 月 8 日に実行委員会の設立総会が阿蘇市内で開催されました。その中で、サミット･シンポジウムの会期､実行委員会の規約、役員の選任などの協議が行われ、委員長として阿蘇農業協同組合の工藤保雄氏が、名誉会長として熊本県知事の蒲島郁夫氏が選出されました。

当ネットワークからは高橋佳孝会長が、実行委員会のメンバーとして出席しました。詳細な内容や日程は今後、実行委員会などで決まっていくことになりますが、現在のところ、次のような会期などが決まっています。

【期日】2014 年 11 月 22 日（土）～24 日（月）
【場所】阿蘇プラザホテル（熊本県阿蘇市）
【主な予定】
11/22　オプショナルツアー
11/23　第 10 回全国草原シンポジウム
　午前：基調講演、各地からの報告
　午後：分科会、子どもサミット
11/24　第 10 回全国草原サミット

■各地からの報告

南会津地方の草原

（横田潤一郎・弘子：東京都在住）

ご存知のとおり、全国草原再生ネットワークでは草原マップを公開していますが、東北地方を調べてみると「わらび園」というキーワードが出てきます。わらび園とは、山菜とりのために草原を有料で開放しているところで、福島県や新潟県などに多くあるようです。今回は、昨年 6 月に訪れた南会津地方のわらび園を中心に、南会津地方で出会った草原にかかわる風景をご紹介します。東北ではこれから「わらびのシーズン」を迎えますので、ぜひ、皆さんも一度訪ねてみてください。

□藤生わらび園

今回は、南会津町藤生（とうにゅう）の「藤生わらび園」を訪ねました。面積は 80ha。鉄山の東斜面が一面の草原となっていました。わらび園では草原維持のため、毎年野焼きを実施しているようなのですが、藤生では毎年 5 月上旬に、各家から 1 名ずつ、合計 90 人ぐらいで野焼きをしているとのことでした。とてもキレイに焼かれていて、スミレやワラビなど、春の植物がたくさん芽を出していました。

関西出身の私が驚いたのは、このワラビの大きさです。大きいものでは膝上まで伸びているのに全然葉っぱが開いていません。今まで食べてきたワラビとは大違い！　粘りもあって、本当に美味しかったです。東北で草原が、観光わらび園として今も維持されている理由がよくわかりました。

ところで、このわらび園ですが、有料である他に色々と決まり事があることもわかりました。藤生わらび園では、入山できるのが水曜日・土曜日・日曜日の 8 時半～12 時と決まっています。これは草原のオーバーユースを防止するためで、ワラビなどの山菜を永続的に利用する仕組みです。全国の草原で「口の開け」など、資源利用に厳格なルールがあったことはよく知られていますが、それが今も脈々と受け継がれていることに驚きました。草原から得られる恵みを持続可能な形で維持しつつ、わらび園というビジネスの形で活用する取り組みは、草原再生・維持に向けた最も理想的な形の一つであると思います。

大きなワラビ！

資源利用のルールは厳格

美味しかったです！

□昭和村・からむし織りの村

南会津町の北隣には昭和村という村がありますが、そこでは、カラムシ（苧麻（ちょま））を生産しています。カラムシとは、日本でもかつては様々な地方で生産されていた繊維植物で、布の原料となります。その布は、「氷をまとう」と表現されるほどひんやりとした触り心地で、非常に高品質なものです。カラムシ生産のために焼畑が行われるようですが、さらにカラムシ生産には草原が密接に関わっていることがわかりました。

カラムシ畑の焼畑は、通常イメージする焼畑と異なり、森を切り開いて焼くわけではありません。主な目的も、土壌を豊かにするためではなく、カラムシの生長を均一化することと、病害虫の予防のようです。見た目は普通の畑ですから、燃料も畑にはなく、持ち込んだカヤを畑に敷き詰め、それを燃やすことで目的を果たしています。つまり、火という生産手法を得るために草資源を採取しています。

さらに焼畑が終わると今度は畑の周りにカヤを用いた垣根が作られます。繊維作物なので、風で揺れたり動物が侵入したりして、皮が傷つかないよう大切に守られるそうです。

しかし今では、他の地域と同様にカヤ場が減ったことで、カヤの確保に苦労されているようです。村内には、新たに地元の方々が整備したコガヤ（カリヤスの事と思われる）の刈場を見つけることができました。今回は地元の方のお話を聞くことができませんでしたが、また機会があれば、カラムシのお話と草原についてお伺いしたいと考えています。

萱で作った垣根

□茅葺き屋根集落

南会津地方は、以前ご紹介した大内宿を始め、非常に多くの茅葺き民家が残っています。たまたま、南泉寺で茅葺き屋根を修復している職人さんにお話を聞くことができました。南泉寺の楼門は、福島県重要文化財となっていて、20年に一度葺き替えるということです。また、この楼門の工事が終わると、次は民家の屋根葺きがあるとのこと。職人も高齢化

コガヤ生産地

南泉寺の説明板

が進んでいるとのことですが、今は技術の伝承に取り組まれているそうで、この地方の方々の茅葺き屋根に対する想いを感じることができました。

参考文献：六百余年の伝統　からむし（苧麻）全集（2007 年）　羽柴平吉著

南泉寺の楼門

吹き替えの様子

雲月山の山焼きキッズプログラム

（佐久間智子：広島県在住）

広島県の北西部に位置する雲月山は 2005 年に山焼きが再開されてから、今年で 9 年目になります。昨年は天候不良のため、山焼きが中止になりましたが、今年は 4 月 12 日に無事に山焼きが行われました。

雲月山の山焼きは地元住民とボランティアで行われています。この山焼きでは、2009 年から小学生以下の子どもを対象としたキッズプログラムを行っています。キッズプログラムの目的は安全確保と子ども同士の交流です。キッズプログラムを行う以前は、ボランティアとして参加する子どもは保護者と一緒に防火帯作りの手伝いをし、火入れは保護者と一緒に見学することになっていました。しかし、火入れのときにも保護者が子どもを連れて山に上がっていることがあり、本部から注意を受ける場面がありました。

火入れの説明をうける

防火帯づくりに参加する子どもたち

また、この山焼きには、地元の雲月小学校の生徒が学校行事として参加していました。雲月小学校の生徒も防火帯作りの手伝いを行っていましたが、町外からボランティアとして参加した子どもと雲月小学校の生徒は別々に行動するため、積極的に交流する場はありませんでした。このようなことから、山焼きをより安全に行い、山焼きに参加する子ども同士が交流できるように、キッズプログラムが始まり

ました。

キッズプログラムでは、事前に先生と話し合い、雲月小学校の生徒とボランティアで参加した子どもが一緒に草集めをしたり、歌の練習をして発表したり、火入れの見学をしたりしました。小学校と合同で行うキッズプログラムの課題は、学校行事として参加した生徒と、休日にボランティアで参加した子どもで山焼きに参加する気持ちが異なるということでした。その後、ボランティアで参加していた子どもが高学年になるにつれて、町外からの子どもの参加数は少なくなりました。また、2013 年に雲月小学校が廃校となり、芸北小学校へ統合されました。

昨年は天候不良で山焼きが中止となったため、今年は芸北小学校へ統合されて初めての山焼きとなりました。今年の山焼きには芸北小学校の 5、6 年生と先生がボランティアとして参加しました。また、保護者と一緒に芸北小学校の 2 年生が 1 人と町外から 4 才の幼児が 1 人参加しました。山焼きに参加した 5、6 年生のほとんどは山焼きが初めてであり、先生も山焼きが初めてでした。雲月小学校に通っていた生徒とボランティアで参加したことのある生徒がリーダーとなり、午前中は防火帯作りの草集めを行い、午後は山焼きを見学しました。今年は山焼きを体験することが目的であり、ゆっくりとしたペースで 1 日を過ごしました。

来年はどのようなキッズプログラムになるか分かりませんが、その時の状況に合わせながら、良い形を作っていきたいと思います。

プログラムを体験中

火入れ中は離れたところから見学

■「全国草原リレー」（第 7 回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第 7 回は、理事でもある笹岡氏に、レンゲツツジ群生地のあるの草原につて紹介して頂きます。今回の執筆者が、次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。

■レンゲツツジの美しい草原二題■

（笹岡達男：ネットワーク理事）

国安さんからのバトンが、あれよあれよという間に回ってくるのが、この「全国草原リレー」の連載です（笑）。

大慌てで前回の話題の焼き直しになりますが、私がかつて勤務した国立公園で出会った草原二題です。いずれもレンゲツツジ群生地として著名で標高や面積も似通っており、6 月中～下旬に見頃を迎えて多くの観光客やカメラマンで賑わうという共通点があるので、季節の話題として改めて紹介します。

①湯の丸高原（群馬県嬬恋村）
（標高約 1800m、面積 272ha）

群馬県嬬恋村と長野県東御市が境を接する湯の丸山（標高 2101m）は、高山植物や高山蝶の宝庫としても有名ですが、その中腹に広がる湯の丸

湯の丸高原（コンコン平）

高原には、明治 37 年に長野県東部町（現：東御市）の牧野組合が、鹿沢温泉紅葉館の所有地に湯の丸牧場を開設し、およそ 300 頭の牛・馬・綿羊が放牧されたと言われています。この牧野利用により形成された草原とレンゲツツジ群落は、その後上信越高原国立公園（昭和 24 年）や国の天然記念物（昭和 31 年）に指定され、牧畜業が盛んであった昭和 50 年代までは、放牧牛馬の選択的摂食により、草原景観とレンゲツツジ群落は良好な状態で維持されていました。

しかし、その後の牧畜業の衰退により放牧家畜の頭数は減少の一途をたどり現在では 20～30 頭にまで減りました。このため、しだいに低木の繁茂が始まり、現在では周辺部から高木も含めかなりの樹木が侵入する結果となっています。最盛時には 90 万株あったと言われるレンゲツツジも 60 万株まで減少し、活力の低下が懸念されたため、平成 9 年以降、文化庁補助事業や環境省グリーンワーカー事業などの支援を受けながら地元ボランティアを中心とするレンゲツツジ保護増殖活動が行われてきました。現在は「湯の丸レンゲツツジ保存会」が中心となって、パークボランティア、インタープリター会、地元観光協会、地元や首都圏の学校生徒など様々なセクターのボランティアと協力しながら、侵入高木の伐採、下草刈りや低木の芽を摘む作業を続けています。現場へは、長野・群馬県境に位置する地蔵峠スキー場（夏山リフトあり）と群馬県鹿沢温泉（旧鹿沢）から簡単にアクセスできます。

②乗鞍高原一の瀬地区（長野県松本市）
（標高約 1500m、面積約 250ha）

乗鞍岳（標高 3026m）への信州側玄関口にあたる乗鞍高原は、古くは地元大野川区の人々の出作り地としてソバの焼き畑等が行われ、明治 45 年に牧場としての利用が始まったと言われています。今から 80 年前の昭和 9 年には中部山岳国立公園に指定されて登山・スキー客の来訪が始まり、昭和 30 年代以降は、スキー場の開設を中心に旅館・民宿・ペンション等の連なる観光集落として発展してきました。こうした歴史の中、牧場としての利用が続いている一の瀬地区の放牧頭数は最盛期には 200 頭を超えたと言われていますが、平成 18 年には牛馬を合わせて 20 頭を数えるにとどまり、国立公園の園地としても利用される牧場及びその周辺の草原やレンゲツツジ群落の景観の変化が懸念されるようになりました。当地でも様々な地元有志の団体が侵入樹木の伐採や灌木・下草の刈り払い等の景観保全事業に取り組んでおり、雄大な乗鞍岳をバックとした草原で観光イベントを開くなどの活動を展開しています。乗鞍高原へは、中央線松本駅からアルピコ交通の電車・バスにて約 1 時間 30 分で到達できます。

両地区とも、観光資源の大きな目玉としてのレンゲツツジ群落に着目した景観維持・保全活動が

乗鞍岳をバックに（乗鞍高原一の瀬地区）

関係者のモチベーションを高め、草原再生にも結びついている事例と考えることができますが、放牧牛馬が果たしてきた役割を人が代行することについて、今後どのように持続的な活動として地域のくらしや活性化に根付かせていくかが課題とも言えるでしょう。

一の瀬牧場でくつろぐ牛たち
（全頭集合でも少し寂しい）

■草原をめぐる動き（2014 年 5 月～7 月）

4/26-27 春の風物詩「茅場の野焼き」（場所：群馬県みなかみ町上ノ原、連絡先：森林塾青水）

5/10 サクラソウの観察会（場所：美和東文化センター、連絡先：西中国山地自然史研究会）

5/10, 6/14, 7/12「茅葺き×デザイン」－草のリズムで暮らしていく。あたらしい茅葺き－（場所：こうべまちづくり会館（神戸市中央区）、連絡先：神戸市すまいの安心支援センター）

5/11 乙女高原の遊歩道づくり（場所：乙女高原（山梨県山梨市牧丘町）、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

5/11, 25 乙女高原のスミレ観察会（場所：乙女高原（山梨県山梨市牧丘町）、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

5/17, 6/7, 7/5, 9/20, 10/4 草地生態系保全講座（全 5 回）（場所：高槻市・鵜殿のヨシ原他、連絡先：公益社団法人大阪自然環境保全協会 草地生態系保全講座係）

6/14-15 茅葺きフォーラム（長浜大会）（場所：滋賀県長浜市慶雲館、連絡先：日本茅葺き文化協会）

6/15 ススキ刈り取り実験その 1（場所：乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

6/29 マルハナバチ調べ隊（初夏編）（場所：乙女高原（山梨県山梨市牧丘町）、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

■第 8 回全国草原再生ネットワーク総会の案内

ネットワークの総会を下記のとおり開催します。総会にあわせて、兵庫県砥峰高原の草原を見学するエクスカーションも計画しています。詳細は後日お知らせします。

【日　時】 2014 年 6 月 28 日（土）午後
【場　所】神戸市内を予定
【内　容】事業報告、事業計画、各地からの報告や意見交換　　※終了後、懇親会を予定
※エクスカーションは、6/29（日）に兵庫県の砥峰高原を予定しています。

全国草原再生ネットワーク　ニュースレター　vol.18　2014 年 4 月号

全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1
NPO 法人緑と水の連絡会議内　　Tel. 0854-82-2727　　Fax. 0854-84-0262

【編集後記】第 10 回の全国草原サミット・シンポジウムに向けて、実行委員会が立ち上がりました。情報は随時、ニュースレターやホームページでお伝えしていきます。